日本文学全集
43

谷崎潤一郎
(二)

刺青・異端者の悲しみ・蓼喰う虫・吉野葛
蘆刈・春琴抄・少将滋幹の母・鍵・他

河出書房

谷崎潤一郎(二)

カラー版日本文学全集　43

1970©

昭和四十五年八月二十日　初版印刷
昭和四十五年八月三十日　初版発行

定価　七五〇円

著　者　谷崎潤一郎
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社
製　函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表)　振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331143-0961

目次

谷崎潤一郎㈡
刺青……五
異端者の悲しみ……九
蓼喰う虫……四〇
吉野葛……一二四
蘆刈……一三七
春琴抄……一五九
猫と庄造と二人のおんな……一八六

少将滋幹の母……三三〇
鍵……二八三
注釈　紅野敏郎　三四〇
解説　野口武彦　三五三
巻頭写真　濱谷浩
色刷挿画　蠶喰う虫　古野葛　望月春江
蘆刈　森田曠平
春琴抄　橋本明治
猫と庄造と二人のおんな　中島清之
少将滋幹の母　岩田正巳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

谷崎潤一郎

(二)

刺青

其れはまだ人々が「愚」と云う貴い徳*を持って居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁*の笑いの種が尽きぬようにと、饒舌を売るお茶坊主だの幇間だ*のと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であった。女定九郎、女自雷也、女鳴神*、――当時の芝居でも草双紙*でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。誰も彼も挙って美しからむと努めた揚句は、天稟の体へ絵の具を注ぎ込む迄になった。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍った。

馬道*を通うお客は、見事な刺青のある駕籠舁を選んで乗った。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、蔦の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨をした。時々両国で催される刺青会では参会者おの〳〵肌を叩いて、互いに奇抜な意匠を誇り合い、評しあった。

清吉と云う若い刺青師の腕きゝがあった。浅草のちゃり文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に絖地*となって拡げられた。刺青会で好評を博す刺青の多くは彼の手になったものであった。達磨金はぼかし刺が得意と云われ、唐草権太は朱刺の名手と讃えられ、清吉は又奇警な構図と妖艶な線*とで名を知られた。

もと豊国国貞*の風を慕って、浮世絵師の渡世をして居たゞけに、刺青師に堕落してからの清吉にもさすが画工らしい良心と、鋭感とが残って居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購う訳には行かなかった。たま〳〵描いて貰えるとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪え難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらえねばならなかった。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快楽と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れ上がる肉の疼きに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、其の呻きごえが激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。刺青のうちでも殊に痛いと云われる朱刺、ぼかしぼり、――それを用うることを彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする為め湯へ浴って出て来る人は、皆半死半生の体で清吉の足下に打ち倒れたまゝ、暫くは身動きさえも出来なかった。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「嘸お痛みでがしょうなあ」

と云いながら、快さそうに笑って居る。

意気地のない男などが、まるで知死期の苦しみのように口を歪め歯を喰いしばり、ひい〳〵と悲鳴をあげることがあると、彼は、

「お前さんも江戸っ児だ。辛抱しなさい。――この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

こう云って、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまわず刺って行った。また我慢づよい者がグッと胆を据えて、眉一つしかめず怺えていると、

「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突っ張者だ。――だが見なさい、今にそろ〳〵疼き出して、どうにもこうにもたまらないようになろうから」

と、白い歯を見せて笑った。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺

り込むことであった。その女の素質と容貌とに就いては、いろ〳〵の注文があった。啻に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼はなか〳〵満足することが出来なかった。江戸中の色町に名を響かせた女と云う女を調べても、彼の気分に適った味わいと調子とは容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながらも、彼はなお其の願いを捨てずに居た。

丁度四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清の前を通りかゝった時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかげから、真っ白な女の素足*のこぼれて居るのに気がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持って映った。その女の足は、彼に取っては貴き肉の宝玉であった。拇指から起って小指に終る繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける足であった。この足を持つ女こそは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であろうと思われた。清吉は躍りたつ胸をおさえて、其の人の顔が見たさに駕籠の後を追いかけたが、二三町行くと、もう其の影は見えなかった。

清吉の憧れごゝちが、激しき恋に変って其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であった。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくわえながら、錆竹の濡れ縁に万年青の鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪うけはいがして、袖垣のかげから、ついぞ見馴れぬ小娘がはいって来た。

それは清吉が馴染みの辰巳の藝妓*から寄こされた使いの者であった。

「姐さんから此の羽織を親方へお手渡しゝて、何か裏地へ絵模様を画いて下さるようにお頼み申せって……」

と、娘は鬱金の風呂敷をほどいて、中から岩井杜若の似顔画のたとうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

其の手紙には羽織のことをくれ〴〵も頼んだ末に、使いの娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私のことも忘れずに、この娘も引き立てゝやって下さいと認めてあった。

「どうも見覚えのない顔だと思ったが、それじゃお前は此の頃此方へ来なすったのか」

こう云って清吉は、しげ〳〵と娘の姿を見守った。年頃は漸う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のように物凄く整って居た。それは国中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代ったみめ麗しい多くの男女の、夢の数々から生れ出ずべき器量であった。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰ったことがあろうがな」

こう訊ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備後表の台に乗った巧緻な素足を仔細に眺めた。

「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたびたびまいりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑って答えた。

「丁度これで足かけ五年、己はお前を待って居た。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。――お前に見せてやりたいものがあるから、上ってゆっくり遊んで行くがいゝ」

と、清吉は暇を告げて帰ろうとする娘の手を取って、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先ず其の一つを娘の前に繰り展げた。

それは古の暴君紂王*の寵妃、末喜を描いた絵であった。瑠璃珊瑚を鏤めた金冠の重さに得堪えぬなよやかな体を、ぐったり勾欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがえし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云い、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛いつけられ、最後の運命を待ち構えつつ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄い迄に

巧みに描かれて居た。

娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入って居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫えた。怪しくも其の顔はだん／＼と妃の顔に似通って来た。娘は其処に隠れたる真の「己」を見出した。

「この絵にはお前の心が映っているぞ」

こう云って、清吉は快げに笑いながら、娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪めた額を擡げて云った。

「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交って居る筈だ」

と、彼は更に他の一本の画幅を展げた。

それは「肥料*」と云う画題であった。画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身辺を舞いつゝ凱歌をうたう小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑え難き誇りと歓びの色。それは戦いの跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んで居た何物かを、探りあてたる心地であった。

「これはお前の未来を絵に現わしたのだ。此処に斃れて居る人達は、皆これからお前の為めに命を捨てるのだ」

こう云って、清吉は娘の顔と寸分違わぬ画面の女を指さした。

「後生だから、早く其の絵をしまって下さい」

と、娘は誘惑を避けるが如く、画面に背いて畳の上へ突俯したが、やがて再び唇をわなゝかした。

「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、其の絵の女のような性分を持って居ますのさ。――――だからもう堪忍して、其れを引っ込めておくんなさい」

「そんな卑怯なことを云わずと、もっとよく此の絵を見るがいゝ。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだろうよ」

こう云った清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑いが漂って居た。

しかし娘の頭は容易に上らなかった。襦袢の袖に顔を蔽うていつまでも突俯したまゝ、

「親方、どうか私を帰しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」

と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」

と云いながら、清吉は何気なく娘の側に近寄った。彼の懐には嘗て和蘭医から貰った麻睡剤の壜が忍ばせてあった。

日はうらゝかに川面を射て、八畳の座敷は燃えるように照った。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顔や、障子の紙に金色の波紋を描いてふるえて居た。部屋のしきりを閉て切って刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚としてすわって居るばかりであった。彼は今始めて女の妙相をしみ／＼味わうことができた。その動かぬ顔に相対して、十年百年この一室に静坐するとも、なお飽くことを知るまいと思われた。古のメムフィス*の民が、荘厳なる埃及の天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾ったように、清吉は清浄な人間の皮膚を、自分の恋で彩ろうとするのであった。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行った。若い刺青師の霊は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたゝりであった。彼は其処に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝったが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかった。娘の帰りの遅きを案じて迎いに出た箱屋までが、

「あの娘ならもう疾うに帰って行きましたよ」

と云われて追い返された。月が対岸の土州屋敷の上にかゝって、夢のような光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分

も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てゝ居た。

一点の色を注ぎ込むのも、彼に取っては容易な業でなかった。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具え始めて、再び夜がしら〳〵と白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蟠った。

春の夜は、上り下りの河船の櫓声に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、霊岸島の家々の甍がきらめく頃、清吉は漸く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼が生命のすべてゞあった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であった。

二つの人影は其のまゝ稍、暫く動かなかった。そうして、低く、かすれた声が部屋の四壁にふるえて聞こえた。

「己はお前をほんとうの美しい女にする為めに、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に優る女は居ない。お前はもう今までのような臆病な心は持って居ないのだ。男と云う男は、皆なお前の肥料になるのだ。……」

其の言葉が通じたか、かすかに、糸のような呻き声が女の唇にのぼった。娘は次第々々に知覚を恢復して来た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しかろう。体を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」

こう云われて娘は細く無意味な眼を開いた。その瞳は夕月の光を増すように、だん〳〵と輝いて男の顔に照った。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰った代りに、私は嘸美しくなったろうねえ」

娘の言葉は夢のようであったが、しかし其の調子には何処か鋭い力がこもって居た。

「まあ、これから湯殿へ行って色上げをするのだ。苦しかろうがちッと我慢をしな」

と、清吉は耳元へ口を寄せて、労わるように囁いた。

「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱して見せましょうよ」

と、娘は身内の痛みを抑えて、強いて微笑んだ。

「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打っ捨って、二階へ行って待って居ておくれ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」

娘は湯上がりの体を拭いもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、魘される如くに呻いた。気狂じみた髪が悩ましげに其の頬へ乱れた。女の背後には鏡台が立てかけてあった。真っ白な足の裏が二つ、その面へ映って居た。

昨日とは打って変った女の態度に、清吉は一と方ならず驚いたが、云われるまゝに独り二階に待って居ると、およそ半時ばかり経って、女は洗い髪を両肩へすべらせ、身じまいを整えて上って来た。そうして苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな眉を張って、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。

「この絵は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持ってもう帰るがいい」

こう云って清吉は巻物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今までのような臆病な心を、さらりと捨てゝしまいました。――お前さんは真先に私の肥料になったんだねえ」

と、女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の声がひゞいて居た。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はこう云った。

女は黙って頷いて肌を脱いた。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

異端者の悲しみ

一

午睡をして居る章三郎*は、自分が今、夢を見て居る事を明かに知って居た。白い鳥が繻子のように光る翼をひろげて、彼の顔の上でばたばたと羽ばたきをして居る。どうかすると、其の羽ばたきが息苦しい程鼻先へ近寄って、溶けかゝった春の淡雪のように、浄く軟かい羽毛が折々彼の睫毛のあたりを爽やかに掠めて居る。――「己は夢を見て居るのだな。」と、彼は幾度か夢の中で考えて居た。彼の意識は見る見るうちに痺れかかって、甘い芳しい熟睡の底へうつらうつらと誘われて行きそうになるが、少し心を引き緊めると直ぐに又蘇生って、脳髄の中を朦朧と照らすようであった。云わば彼は、睡りと目覚めとの中間の世界にさまよいながら、暫くの間覚め切ろうとも眠り込もうとも欲しないで、成る可く現在の半意識の状態に揺られて居たかった。「自分は今、夢から覚めようとすれば覚めることも出来るのだ。」そう思いながら、美しい白鳥の幻をぼんやり眺めて居ることが、不思議な喜びと快さとを彼の魂に味わせた。

窓からさし込む初夏の真昼の明りが、仰向きに臥て居る自分の眼瞼の上に輝いて、それが此のような白鳥の夢となって居る。あのばたばたと鳴る羽ばたきの音は大方風が吹くのであろう。――そうまではっきりと感じて居ながら、猶且夢を見て居られるのが、彼には非常に珍しい、特殊な経験のように考えられて、自分のような病的な神経を持つ人間でなければ、容易に到達する事の出来ない貴い境地であるかの如く楽しまれた。*ひょっとしたら、彼は自分の自由意志で、思うがまゝに好きな錯覚を作り出す能力がありはしないかと疑われて、現在眼の前に浮かんで居る鳥の姿を更に妖艶な女の幻と擦り換えるように、次第次第に想念を凝らし始めた。すると暗黒な背景の奥へ鳥の形がだんだん薄く吸い込まれて、ちょうど子供がおもちゃに弄ぶシャボン玉のような、五彩の虹を湛えた麗しい泡が無数にちらちらと湧き上って来たが、その中で一番大きな泡の面に、奇怪極まる裸形の美姫がいつしかまざまざと映り出して、風に揉まれる煙の如く飄々と舞いながらさま〳〵な痴態を演じて居るのを、彼はたしかに見ることが出来た。

「有り難い、有り難い、己の脳髄は明かに神秘な作用を備えて居るのだ。自分で勝手な夢を織り出す能力を持って居るのだ。己は夢の中で自分の恋人に会う事が出来るかも知れない。成ろうことなら、己はいつまでも斯うやって眠ったまゝで生きて居たい。……」

しかし章三郎は、そう思った瞬間にぱっちり眼をあいてしまった。恰も子供が息を吹き過ぎてシャボン玉を壊してしまったような、取り留めのない悲しみを覚えながら、一旦虚空へ飛び散った幻の姿を取り返すべく、彼はあわててもう一遍眼を瞑って見たが、美女も白鳥も遂に再び彼を訪れて来そうもなかった。

彼はものうげに身を起して、窓際に頬杖をつきつゝ、夢の中に現れた幻の正体かと想われる五月の空の雲のきれぎれを仰ぎ視た。夏らしく晴れ渡った蒼穹には勇ましい南風が充ち充ちて、ところ〴〵に浮游する雲の塊を忙しそうに北へ北へと押し流して居る。

「夢だの空だのはあれ程美観に富んで居るのに、どうして己の住んで居る世の中は、こんなに穢いのであろう。」

そう考えると章三郎は、いよいよ今見た幻の世界が恋いしくなって、遣る瀬なさが胸に益れた。

彼の住んで居る家――日本橋の八丁堀の、せゝこましい路次の裏

長屋にある此の二階の一室には、西の窓から望まれるあの壮快な空を除いて、外に何一つ美感を起させる物はないのである。四畳半の畳と云い、押し入れの襖と云い、牢獄の檻房に似た壁と云い、四方を仕切って居る凡べての平面が、駄菓子を貪るいたずらッ子の頬っぺたのように垢でよごれて、天井の低い、息苦しい室内に一年中鬱積して居る湿っぽい悪臭は、其処に起居する人間の骨の髄まで腐らせそうに蒸し暑く匂って居る。若し此の部屋にたった一つしかない彼の窓から、僅かにもせよ蒼穹の一部分が見えなかったら、章三郎はとうに気が狂って死にはしなかったかと危ぶまれる。どう考えても、此れが万物の霊長を以て誇って居る高尚な生物の棲息する所とは信ぜられなかった。

けれども章三郎は、いかに人間の世が穢くっても、自分が兎に角足を著けて生きて居る大地から全く飛び離れて、お伽噺の子供のように架空的な天国へ昇ってしまったり、夢幻的な楽園へ救われて行ったりしようとは望まなかった。土から生えた植物が、何処までも土に根をひろげて生を享楽して行くように、彼も亦現実の世に執着しつゝどうにかして楽みを求め出したかった。そうして其れが、彼には必ずしも不可能の事とは思われなかった。自分が今住んで居る陋巷のあばら屋の周囲にこそ、あらゆる醜悪や陰鬱や悲運が付き纏わって居るものの、人間の世の凡べてが此れ程に暗く冷たい物であろうとは信ぜられない。寧ろ反対に、思う存分の富と健康とを獲得して、王侯に等しい豪奢な生活を営み得る身分になれたなら、此の世は遙かに天国や夢幻の境より楽しく美しく感ぜられるに違いない。今逆境に沈んで居る彼が、そんな身分に転じようとするのは、まるで妄想に等しい僥倖を願う者かも知れないが、それでも天国や華胥の国*に生れ変ろうとするよりはずっと可能なことである。――斯う思うばかりに彼は世の中や生命に失望する気にはなれなかった。たとえ王侯の地位までには登れないでも、少しずつなりと現在の窮境から上層の社会へ浮び出るようになって欲しい。一尺登れば一尺登ったゞけの楽しみがある。たゞ其の一尺の進歩さえが、彼にはちょいと到達し得る道がないのが腹立たしかった。

同じ人間でありながら、自分はなぜこんな貧民に生れて此世間のどん底を出発点としなければならなかったのか、自分はどうして運命の神からハンディキャップを付けられて居るのか、思えば思うほど章三郎は業が煮えてたまらなかった。それも自分が陋巷に生れて陋巷に死するにふさわしい、頭脳の低い、趣味の乏しい無価値な人間ならば知らぬこと、かりにも最高の学府に教育を受けて、将に文学士の称号を得んとしつゝある有為の青年である。自分は蠢々として虫けらの如く生きて行く貧民の間に伍して、何等の自覚もなく其の日其の日を過して居られる人間とは訳が違う。自分には偉大なる天才があり、非凡なる素質*がある。たま〳〵その天才と素質とが、物質的の成功致富の道に拙くて、藝術的の方面にのみ秀いでゝ居る為めに、いつまでも斯うやって逆境を抜け出る事が出来ないのである。

「ふん、馬鹿にして居やがる。……」

と、章三郎は我知らず大声で口走ったが、後からハッと心付いてびっくりして気を引き締めた。此の頃彼は、屢々頓興な声で独り語を云う癖が付いたのである。それが頭の中に長い間続いて居た思想と連絡のある言葉ならまだしも、どうかすると全く何の関係もない、云わば突然に浮かび上って右から左へ脳髄を通り過ぎて行く"passing whim"*が、あなやと思う隙もなくひょいと口から出てしまって、立派な独り語になる事がある。幸いにして彼がそんな真似をする時は、周囲に誰も居ない場合が多かったけれど、万一、人に聞かれたならば随分耻かしい事だの物凄い事だのをうっかり口走る折があった。そうして其れ等の耻かしい言葉や物凄い言葉は、いつも大概種類が極まって居て、殆んど狂人の譫語としか思われない突飛な文句ばかりであった。彼が最近に一番繁く口走るのは、先ず下に記す三通りの文句である。――

「楠木正成を討ち、源義経を平げ……」

と云うのが一つ。

「お浜ちゃん、お浜ちゃん、お浜ちゃん。」
と、女の名前を三度呼ぶのが一つ。
「村井を殺し、原田を殺し……」
と云うのが一つ。凡そ此の三つが、どう云う訳か最も頻々と彼の独り語に上るのであって、此の中のどれか一つを、一日の内に云わないことはないくらいである。いずれも短い文句であるが、此れ等の言葉を此処に記した文字通りにしゃべってしまってから、章三郎は始めてはっと我に復る。たとえば第一の文句で、「……源義経を平げ……」と云うところまで来なければ、彼は自分の独り語に気が付かない。其処までは夢中で口走って、「……平げ……」へ来ると必ず驚いて口を噤む。第二の文句でも、「お浜ちゃん」の名をきっと三度だけ繰り返す。第三の文句なら「……原田を殺し……」を云い終るや否や、竦然として身ぶるいをする。調子は常に中音で早口で、普通の人の寝言の通りである。

此れ等の独り語に繰り返される名前のうちで、多少なりとも彼の思想に交渉があるかと察せられるのは「お浜ちゃん」と云う名前である。それは章三郎の初恋の女の名であった。薄情な彼は、二三年前に其の女と別れてしまったきり、今頃彼女が何処に何をして生きて居るやら、とんと気にかけても居ないのであるから、斯く迄頻繁に彼女の名前を口走るのは我ながら意外ではあるが、しかし外の名前にくらべればまだいくらかの因縁があるように感ぜられる。自分では忘れた積りでも、「初恋の女」の印象がさすがに深く意識の底に潜んで居て、何かのはずみに時々唇へ出て来るのかも分らない。奇怪なのは村井と原田と云う名前である。此の二つは彼が中学時代の同窓生の名であって、彼は此れ等の友人と別段特殊な交際を結んだ覚えはない。二人共単に年級を同じうしたと云うだけの話で、ろくろく一緒に遊んだ機会もないくらいである。たゞ此の二人は、あの時分級中切っての美少年であって、章三郎は一と頃彼等の容色に心を惹かれた事があった。何でも夜な夜な二人の姿が幻に立って、青春時代の彼を悩ましたものであった。久しい間、半年か一年ばかり彼の頭は毎日二人の妄想に依って苦しめられたが、其の癖実地の交際は遂に最後まで淡い疎い関係で終ってしまった。美少年の方でも彼に親しまず、彼の方でも彼等にちか寄る勇気などはなかったのである。やがて中学を卒業すると、村井は郷里の田舎へ帰って農業に従事し、原田は九州の高等学校の三部へ這入ったと云う噂を聞いた。無論章三郎は其れきり彼等に会いもしなければ、手紙のやり取りをしたのでもない。彼の頭に刻み付けられた美少年の記憶はだんだん年を追うて薄らぎ、もはや彼等の存在をさえ想い出さなくなった時分だのに、近頃突如として二人の追憶が流星の如く頭の中を掠め飛び、おやと思う間に直ぐ又何処かへ消え失せてしまう。その消え失せる瞬間に彼は極まって例の独り語を云う。
「村井を殺し、原田を殺し……」

名前を呼ぶのはいいとして、「殺す」というのが抑も何の為めであるか、彼自身にもさっぱり原因が分らない。云う迄もなく、彼は此の二人に何等の恩怨を抱いて居る筈はないのであるから、彼等を殺す意志などは微塵も有り得ない。たとえ怨みがあったにせよ、彼はなかなか人殺しの出来そうな人間ではないのである。或は将来、何かの機縁で自分が此の二人を殺すような事件の起る前兆ではあるまいか、彼の二人と自分との間に其のような恐ろしい宿業があるという知らせではなかろうか、――そうも考えて見たけれど、あまりに馬鹿々々しい想像であるとしか思われなかった。

馬鹿々々しいだけに、彼は此の独り語を常に最も腹立たしく感じて居た。若しも誰かの居る前で、此の言葉がうっかり口からすべったら、どんなに其の人はびっくりするだろう。彼自身もどれ程きまり悪く、気味悪く感ずるであろう。往来のまん中などで口走った際に、通りかゝりの刑事巡査の耳へでも這入ったら、それこそ彼は警察へ引っ張られて、罪人か狂人扱いを受けるに違いない。
「いゝえ、僕は断じて気違いではありません！」
其の時になって彼がいか程絶叫したって、誰が真に受ける者があろ

う。恐らく精神病院へ連れて行かれて専門の医者の診察を受けても、やっぱり狂人の宣告を受けるにきまって居るだろう。

それから楠木正成と源義経とに至っては、実に実に不思議千万である。こゝになると彼は全く何処から此の名が浮かんで来るのやら、更に見当が分らない。彼は幼少の頃歴史譚が大好きで、太平記や平家物語を度び度び熟読した事があった。どの子供にもあるように、彼も一時は正成や義経を崇拝した時代があった。しかし其の後漸く西洋の思潮や文学を愛するようになってから、日本歴史に対する趣味は次第に忘れられてしまって居た。義経や正成などと云う遠い昔の英雄の事蹟なんか、目下の彼の生活に毫末の感化をも及ぼしては居ない。第一「楠木正成を討ち、源義経を平げ……」と云う文句からして、殆んど意味を成して居ない。彼は此の言葉を口走ると、いつでも顔を真赤にして穴へでも這入りたいような耻かしさを、独り私かに忍ぶのである。

「己にはなぜこんな滑稽な癖があるのだろう。激しい神経衰弱に犯されて居る証拠なのか知らん。」

彼は自分でも、自分の行為を正気の沙汰だと認める訳には行かなかった。どうしても自分にいくらか狂人の素質がある事を、悟らずには居られなかった。たゞ仕合わせにも彼の狂気は発作の時間が短くて、直ちに本心を取り戻す事が出来る為めに、此れ迄他人の注意を惹かずに済んで居たゞけの話である。

今しがた章三郎は、独り語を云ってしまってから「しまった」と云うような顔つきをして、暫く陰鬱に考え込んで居たが、やがて重苦しい溜息をついて、のそりのそりと急な梯子段を降りて行った。玄関の二畳の次ぎに日あたりの悪い六畳の居間があって、そこに肺病の妹のお富が、夜着の襟から青白い額を見せつゝ静かに仰向きに枕に就いて居る。

章三郎が這入って来ると、病人は凹んだ眼窩の奥に光って居る凄惨な瞳を、ごろりと一方へ廻転させてじろじろと兄の様子を見据えた。

「とても助からない病人である。もう一と月か二た月の内には息が絶えるに極まって居る。」そう知って居るせいか、章三郎は此の妹の、奇妙に冴えた神秘な眼の色で睨まれるのが恐ろしくて、便所へ行くのに是非とも其処を通らねばならないのを、此の間から何となく気詰まりに感じて居た。彼は成る可く視線を合わせないように、横を向いて急ぎ足に縁側へ通り抜けると、厠の戸を明けて中へ隠れたきり容易に出て来そうもなかった。

「脳が悪かったら便秘を気を付けないといけない。」

先日医科の友達にこんな忠告を受けてから、彼は毎日湯水を飲んで、出来るだけ多く通じをつけるように努めて居た。それで此の頃は、少くも日に二三回便所へ通って、十五分ぐらいずつしゃがんで居るのが習慣になったのである。動ともすると、しゃがんで居ながら彼は何しに此処へ来たのかを忘れたように、いつ迄もいつ迄も取り止めのない黙想に耽って居る場合が多い。

其の日も彼は大便所へ蹲踞まったまゝ、例の如くいろいろの愚にも付かない思想の断片を、次ぎから次ぎへと頭の中に描いては消し、消しては描き続けたが、そのうちに彼はいつの間にか支那の白楽天の事を考えて居た。

「待てよ、己は昨日も便所の中で白楽天の事を考えて居たような覚えがある。」

彼はふと気が付いて斯う思った。……

「そうだ、たしかに昨日も考えて居た。きのうばかりか、一昨日も今時分便所の中で白楽天を思い出して居た。どうして己は便所へ這入ると、白楽天を憶うのだろう。こゝの便所と白楽天とどんな関係があるのか知らん。」

だんだん連想の流を溯って探求するうちに、彼は程なく関係を見付け出すことが出来た。ちょうど便所の床板の上に、二三日前の新聞紙の切れが落ちて居て、其の中の箱根の温泉に関する記事が、自然と章三郎の眼につくように拡がって居る。原因と云うのは恐らく此処に

あるらしかった。温泉の記事を読むともなく読んで居るうちに、彼の魂は知らず識らず曾遊の地たる箱根の翠嵐にさ迷うて、涼しい谿谷の小川の滸に設けられた、とある旅館の浴室の光景を想い出して居た。清冽な、透き徹るような湯水が、絶え間なく溢れ漲る湯槽の底に身を浸す時の、さながら五体の解れるような肌触りを追懐すると、今度は入浴の快感を歌った有名な唐詩の文句、「温泉水滑洗凝脂。」と云う長恨歌の一節が、古い古い記憶の底から呼び醒された。そうして長恨歌から必然的に、白楽天の連想が彼の頭に現われ来たのである。多分一昨日の朝から此の新聞紙が一つ所に捨てゝあったので、彼は今日までに幾度となく、毎回其の記事へ眼を落しては同じような想像の手数を繰り返しつゝ、とうとう最後に白楽天まで引っ張って来られたものと見える。

此の事実から推定すると、彼の頭の働きは、一昨日も昨日も今日も一つ所に停滞して動かずに居たものらしい。心が常に一定の刺戟に対して、一定の妄想を育むような状態にばかり止まって居たらしい。少くとも章三郎に取って、ベルグソン*の説いて居る「不断の意識の流れ」などが、滞りなく流れて居そうには考えられない。

「……そうだ、一体純粋持続とか云うような事は、あれは真理なのか知らん。……」

それから又五六分間、彼の連想は心理学の問題に移って、いつぞや読んだ事のあるベルグソンの「時と自由意志」の論旨を、ところ〴〵胸に浮べて見たが、大概跡かたもなく忘れ果てゝ、細かい理窟は何一つ覚えて居なかった。にも拘らず、彼は自分が折に触れて、斯う云う高尚な問題にまで考えを及ぼし得る智力がある事を、非常に嬉しく感じ始めた。何と云ったって此の裏長屋に、幾百人と云う住民の居る此の八丁堀の町内に、ベルグソンの哲学なんかを知って居る者は己を除いてありはしない。若しも人間の思想と云うものが、行為と同じく外から観る事が出来るものなら、此の近所の人々はどんなに己の頭の中の学問にびっくりするだろう。

「己は今こんな立派な、こんな複雑な事を考えて居るのだぞ。」

こう云って章三郎は、誰かに自慢してやりたいくらいであった。

「かあちゃん、兄さんはまだ憚りに居るのかい？」

と、部屋から妹の話し声が聞えた時分に、漸く章三郎は便所の中から痺れた足を引き擦って出た。縁側の手洗鉢の前で手を拭いて居ると、彼女はまだぶつぶつと口やかましく呟いて居る。

「まあなんて長い便所なんだろう。兄さんが二三度便所に行くと、大抵日が暮れてしまうじゃないの。ほんとに江戸っ児にも似合わない。もう少し早く出来ないもんかねえ。……ねえかあちゃん、かあちゃんてば！」

終日天井を仰いだ儘、身動きもせずに横わって居る妹は、暗い淋しい家の中で母を唯一の相手と頼み、母との会話に依って纔かに無聊を慰めて居る。自分の死期が、つい一二箇月の後に迫って来たらしい予感に脅かされて、何となく悲しかったり、心細くて溜らなかったりする時には、不意に甘えるような声を出して、「かあちゃん、かあちゃん」と話し掛ける。けれども其れは台所に働いて居る母の耳まで届かない場合が多いので、彼女は折々焦れついて益々性急に「かあちゃん、かあちゃん」と呼び立てる。

「あいよ、あいよ、」

母がおどおどしながら障子越しに答えると、彼女は「ちょッ」と舌打ちをして、

「かあちゃんたらほんとに聾だねえ。さっきから呼んで居るのに、いくら用をして居たって聞えそうなもんじゃないか。」

斯う口穢く罵って叱り付けたりする。もともと十五六の小娘にしては恐ろしい程にませた怜悧な子であったのが、不治の病に陥ってから一層神経過敏になって、頑是ない子供のような我が儘を云い募るのを、母は尚更不憫に覚えて快く許して居るのであった。

しかし兄の章三郎には、瀕死の妹の生意気な口のきゝようが、小面憎くてならなかった。「瀕死」と云う薄気味の悪い武器を提げて、親

兄弟に悪体をつく彼女の態度に接すると、折角起りかけた同情も忽ち反感に変ってしまった。

「馬鹿！　子供の癖に餘計な事を云うな。可哀そうだから黙って居れば、好い気になって増長しやあがる。病人なら病人らしく、蒲団でも引被って小さくなって居ろ。もう直き死ぬ人間でも生意気な奴は大嫌いだ！」

彼は思い切って怒鳴り散らしてやりたい事が度び度びあった。彼女が死ぬ前に是非一遍、頭ごなしに打ち懲らしてやらなければ、腹が癒えないとさえ考えて居た。ところへ丁度便所の叱言を聞かされたので、章三郎はむかむかとしながら猛悪な眼つきで病人の顔を睨みつけたが、例の物凄い、不思議に落ち着いた、西洋の魔女の持って居そうな冷静な瞳に睨み返されると、やっぱり気後れがして黙ってしまった。今妹と喧嘩をすると、あの怪しげな、じっと自分を視詰めて居る瞳が、やがて彼女の死んだ後まで長く此の部屋に残って居て、夜な夜な彼を睨み付けるに極まって居る。外の人なら知らぬこと、臆病で病的な神経を持つ章三郎に取って、其れは確かに有り得べき事実、あまりに明かな事実である。少女の癖に母や兄を嘲けり罵るのは不道徳な行為に違いない。死にかゝって居る病人であっても、悪事は悪事だから叱責するのが当然であるのに、此の病人はなぜか奇妙な強味を持って居て、叱った者が却って良心の苛責に悩まされる。――それを知って居る章三郎は、いまいましいとは思いながら、結局虫をこらえて居るより為方がなかった。

病人は、誰も相手にしてくれないので、しゃべる張り合いが抜けたものか、程なく息切れがしたようにぶつりと声を途絶えさせた。そうしてばちばちと相変らず眼を光らせて、枕許を通り過ぎようとする兄の後ろ姿を見送って居た。兄は彼女の視線を避けながら、一旦梯子段の上り口まで行きかけたが、また戻って来て、恐る恐る病人の寝床の傍の押し入れを明けた。

「兄さん、其処を明けて何を出すのよ。」

と、妹は突慳貪に嘴を入れた。

「此の間おっかさんが日本橋から借りて来た蓄音機があったろう。あれはもう返してしまったのかい。」

章三郎は真暗な、黴臭い戸棚に首を挿し込んだまゝ、出来るだけ優しい調子で尋ねた。

「返しゃしないけれど、其れをどうするって云うの。――そんな所を捜したってありゃしないわよ。」

「あれをちょいと、二階へ借りて行こうと思うんだけれど、何処にしまってあるんだい。」

兄は押し入れから顔を出して部屋の中を見廻した。向う側の壁に着いて居る箪笥の上に、棒縞の風呂敷を被せた四角な品物の載って居るのが、蓄音機らしい恰好をして居た。

「兄さん、勝手にそんな物を引き擦り出しちゃいけなくってよ。その蓄音機はお葉ちゃんが私に貸してくれたんじゃないの。乱暴な真似をして音譜に瑕をつけたりすると、あたしが怒られるから止して頂戴よ。」

「いゝじゃないか、ちっとぐらい借りて行ったって。瑕なんか付けやしないから大丈夫だよ。」

「あれ、かあちゃん、兄さんが蓄音機を持ち出したのよ。」

兄が平気で箪笥の上から包みを下して、機械をいじくり始めると、病人は癇を昂らせて母を呼んだ。

「章三郎、お前お富が止せと云うんだから止したらいゝじゃないか。」

勝手口で洗濯をして居た母は、両手にシャボンの泡を着けて襷を掛けたまゝ出て来て云った。

「……その蓄音機はお葉ちゃんが大事にして居て、瑕を付けられると困るからって、貸すのを嫌がって居たんだけれど、お富が聴きたがるもんだから私が漸く借りて来てやったんじゃないか。ほんとうにお前のような乱暴者が、針の付け方も知らない癖に無理な真似をして壊しでもしたらどうする気だい？　内じゃあお富より外に、お父つぁん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com